

あった。斎藤時頼も横笛もホントに好きだった。この作品を愛読していた頃に心引かれる横笛らしき人が暇に宿って離れなかった。文庫本の表紙裏に「滝口入道」の感動とそれにつながる懐かしい人の事を書き記しておいた。先生がこの本をご覧になって「珍らしい文庫本ですね」とおっしゃって、乞われるままにお貸ししてしまった。異本研究の資料にでもなさるのお考えであろうと察して素直にお渡ししたものの今でもあの表紙裏の事を思うと面を伏せたい思いである。先生もキツト苦笑なさった事であろう。もしあの本が少しでも先生のお役に立ち、お棺の中にも納められて先生のお伴をしていったとしたら自分が持っているよりはどれ程価値ある役目を果たした事かと嬉しく思う事である。

先生の考証は微細に亘って誠実であり学界でもその蘊蓄は定評があった。そして立命館にあっては我々が国文科について語る時には常に誇り得る恩師であった。しかし先生は御自分の専門に属する事であっても至極穏やかに控え目にお話されるのであった。御存知ない事は実に卒直に「知らない」とおっしゃる。学者には自分の関連する学問についてこ

の言葉はなかなか言いにくいのではなからうか。曲りなりにでも活券の維持に努める場合が多い。もしそれを言う場合には何らかの意図か反撥的な含みのある場合が多い。先生の場合は何の構えも銜いもなく、学者としての良心の発露としてこの言葉を発せられるとしか受けとれなかつた。元の同僚でいま広島大学に転じた〇君という京大出の論客が「『知らない』なんて学者の言いにくい言葉の後藤先生ほど潔く卒直に言われる人はいないですよ。僕らのような若い者にでも丁寧な言葉遣いで話されるし、頭の下る人格者ですね。学者には稀な方です。」としみじみと述懐していたことがあった。

学者を自認する者は一般に尊大である。もちろん例外はある。先生はそうした意味からは例外中の例外であると申し上げる方ではなかっただろうか。大学は教育の一環として考えられる。教育は師弟の間に人間的な溝があつては効果を期し難い。尊大である事は何らかの差別意識か威勢の表示であり、時には虚勢でさえある場合がある。先生は真の学者であると共に秀れた教育者でもあったと信ずる。立命館は惜しい方を手放して他の大学に

取られたものである。当時優遇の道を怠つたのではないだろうか。そして今また学界は惜しい先生を永遠に失つた事を痛恨するものである。追憶を新たにして敬仰一入の思いである。(昭和二十二年九月卒、京都府立朱雀高等学校)

後藤丹治先生の思い出

滝 典 通

御停年にまだ間のあられるはずの後藤先生がおなくなりになられたと承わった時、私の記憶に即座によりみがえつたのは、終戦前後の先生のお姿であった。物質が欠乏して、都会の人達がすべて、生きんが為に食糧の調達などで東奔西走していた頃とはいえ、ひたすら学問の研究に専念していられた先生にとつて生活の御苦労はなみたいていではないように拝察された。一部の学生の中から何とか御援助申さねばという声もあったが、われわれ自身も食ひかねる当時の状態では、どうにも致し方がなかつた。その頃、先生は過労のため、御講義の帰りに階段で倒れられて、暫く病床につかれたりもなさつたと記憶している。

私は、終戦の翌年大学を卒業、一年あまり京都にいて郷里に引き上げ、その後先生にお逢せずじまいなので、あの頃の先生の、色白のお顔にやややくみをおびられた、いたいたしい印象が、脳裏に刻まれていて、それがこの度の悲報と直接結びつくのをどうしようもなかった。やはり戦争がいけなかったのだ。あの頃の御無理が、これからいよいよ貴重な御研究を集大成なさらねばならぬ尊い先生のお命をお縮めたのだ、そういう思いがしきりにして、一しお先生の御逝去が悔まれてならない。

学生時代、私どもは先生から、建礼門院右京大夫集や兩月物語などの御講義を拝聴した。爆弾の洗礼を免かれた京都でも、毎日のように警戒警報や空襲警報が発令されていた頃であった。われわれ学生の気持はともすればうわつて学問から離れがちであった。しかし、先生の教壇の御態度は終始一貫して真摯であられた。一字一句もゆるがせにされず、あらゆる資料をあげて御講義をなさる先生の御態度には、時勢の変動などに左右されぬ、学問への深い愛情と、不動の信念がにじみ出ていた。あるいは、人は、象牙の塔にこ

もるとか、学問のための学問とか、けなしもしようが、こうした先生の御態度が、どれだけわれわれの失われ勝負学問への情熱をふるいたたせて下さったことか。

短軀・童顔・柔和さそのものの肉体の深奥に、学問への不屈の情熱を静かに燃えたぎらせていた。先生はそういうお方であられた。たしか終戦の年の春だったか、当時私は学童疎開に付き添って、香川県白峯山陵の麓の松山村にいたが、先生から、清水先生と御一緒に緒して、そちらへ行きたいから宿や案内をたのむとの御便りを頂いた。白峯御陵は崇徳上皇をめぐって、先生の御専門の軍記物語と大いにかかわりがあり、その上兩月物語にも取材されているので、実地に御踏査なさる御気持ちからであられたと思う。私は、先生を御案内する光栄に胸をおどらせ、その日を様しみに、色々資料なども蒐めて御待ちしていた。ところが、当時の急迫した状態で、遂に汽車の切符が入手出来ず、やむなく中止なさる旨の御通知があつた。せっかく楽しみにしていらつしやつたのにと残念でたまらなかつた。そんなこともあって、私は先生の御講義に出られない埋め合わせのレポートに「白峯山陵

と軍記物語」という雑文を御送りした。粗雑なものなのに、当地の伝説などが目新しかったせいもあつたか、先生からお褒めのはがきを頂いて恐縮したことがあつた。

今年の夏休みに、私の学校の文学散歩班を連れて白峯御陵に行くことが決まった。その日、ゆくりなくも先生御逝去の御便りに接し、感慨うたた無量であつた。同じ四国の地に住んでいる私は、いつかよい機会を得てと期待していたのに、もう永遠に白峯に先生のお伴をする日は失われてしまった。

松山の波の景色はかはらじを

かたなく君はなりましにけり

崇徳上皇を偲び奉つた西行のこの歌が実感をもって口ずさまれてならない。今はただ、白峯御陵に先生の御冥福をお祈りする日を持つばかりである。(昭和二十年九月卒、徳島城南高校教諭)

後藤丹治先生

田口正直

後藤先生に親しく御講義をお受けした時から、はやくも七年の歳月が経つ。その御講義